硯心会書展だより

東京学芸大学書道科卒業生

第１号

発行にあたって

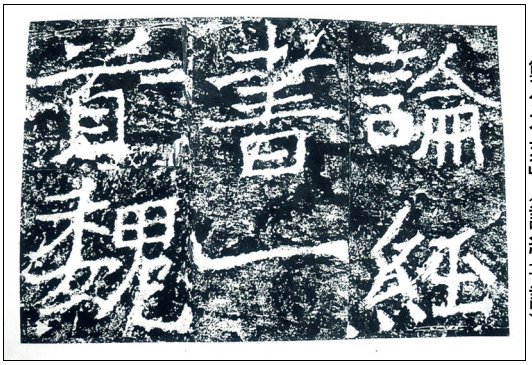
硯心会理事長　広瀬裕之

東京学芸大学書道科同窓会である硯心会は、設立されてから約六〇年の歴史を有します。歴代の先生方・役員の方々、会員の皆様のご貢献とご協力によって年々発展し今日の盛況を迎えております。

硯心会本部主催の硯心会書展は当初いろいろな場所で開催されていましたが、東京銀座に会場を移して以後三〇回目の記念展を昨年度迎えました。同じく昨年度、千葉県では千葉硯心会書展が第四〇回展を開催、埼玉県では埼玉硯心会書展が第三五回展を開催、群馬県では群馬硯心会書展が第一〇回展開催というように、一斉に記念すべき節目の年（回数）を迎え、心からお祝い申し上げます。これらの展覧会はいずれも母校書道科（書道分野）を卒業し、それぞれの地で活躍しておられる方々を中心としての展覧会です。書を通して今の自分をみつめ、かつ先輩後輩の交流の場としてそれぞれ独自性を出して発展して参りました。「節目の年を迎えた記念として、またそれぞれの書展の広報も兼ねて、硯心会でそれぞれの会場の様子等情報交換を兼ねて会報を作成してはどうか。」という貴重なご意見を頂戴しました。春の理事会においてお諮りしたところ、とにかくできることから始めてみようということとなりました。記載方法や内容等は、各展に一任し、自由に記述していただきました。

ここに「硯心会書展だより」第一号ができましたのでお届けいたします。

第三〇回展・会場風景



第三〇回展記念特別展示
東京学芸大学書道分野蔵
「鄭公石刻」（論経書詩）

第三十回・硯心会書展のご報告

昨年の硯心会書展は、平成二十三年七月二十日から二十三日まで、銀座洋協ホールにて開催されました。東京で開催される硯心会書展は、毎年同時期・同会場にておこなわれています。今回展では、第二期（昭和二十九年卒業）から五十九期（平成二十三年卒業）までの八十二名が出品しました。硯心会書展の特徴は、東京学芸大学書道専攻で学び、卒業したという縁でつながり、世代や流派を越えて、幅広い作風の書作品が展開されていることであるといえるでしょう。大学卒業後も、年齢を問わずして、この展覧会を通して卒業生同士が交流し合える貴重な場です。

昨年は第三十回という節目の展覧会でした。これを記念して、志賀直哉旧蔵の「鄭公石刻」（全十冊二帙・剪装本）の一部を特別展示することとなりました。鄭道昭を筆者とする中国・北魏時代に刻された石刻の碑法帖です。「論経書詩」、「鄭羲下碑」、「天柱山題字」、「中明之檀題字」です。これらの碑法帖は、現在東京学芸大学書道科が所蔵しています。本学名誉教授の小木太法先生のお話によりますと、志賀直哉門下であった瀧井孝作氏から東京学芸大学に寄贈されたといいます。写真に挙げているように、碑法帖は展示ケースに並べて展示され、大変好評を博しました。

節目の展覧会を終え、これからも更に充実した展覧会となるよう精進し、新たな企画も検討していきたいと考えております。

文責　硯心会書展部　柳田さやか（五四期）

千葉硯心会書展の歩み

千葉硯心会書展が産声をあげたのは、今から四一年前の一九七二年（昭和四七年）のことでした。その頃、県内高校の書道の教員は千葉師範卒業の習字検定合格者と東京学芸大学出身の数名だったそうです。浅見錦龍先生のお父様で、千葉県の書道教育にご尽力くださっていた浅見喜舟先生と学芸大学の教授であった伊東参州先生とは、当時、たいへん懇意になさっていたといいます。そんな関係で、伊東先生のお世話で学芸大学の卒業生が多く千葉県に着任するようになったそうです。はじめ、県内高校書道教員は東京豊島師範出身の浅見錦龍先生お一人でしたが、中村象閣先生の後任として、学芸大書道科六期卒業生の揚石徳司先生が市立船橋高校へ着任されて以来、根岸喜八先生・小川定男先生・檜山照之先生・神山重信先生・野口浩先生などが続々と着任され、県内高校書道教育が活気を呈してきました。そんな中、錦龍先生と

揚石先生で話し合って同窓の展覧会でもやってみようかと、目良俊夫先生・飯森由美先生にお手伝いを願って始めたのが、第一回展でした。

千葉硯心会は原則として千葉県在住・在勤の東京学芸大学書道科出身者を会員としていますが、現在の会員数は一五〇名以上にのぼっています。

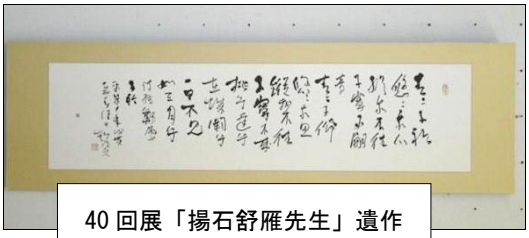
書展には毎年四〇名～五〇名程度の有志会員の力作が出品され、会場を賑わせています。初めのうちはＪＲと京成の千葉駅をつなぐ「千葉ショッピングセンターギャラリー」で小品を持ち寄っての展覧会でした。発足のいきさつもあり、賛助出品として伊東先生・錦龍先生の玉作も毎年ご出品いただいてきました。

錦龍先生のご尽力で「千葉県立美術館」で開催できるようになって早一〇年以上、会場も格段に広くなり、現在では大作が中心です。本会の創設と発展に深く携わり、六〇代前半という若さで他界された揚石先生の遺作も毎年出品されています。

また、二〇回展・三〇回展・三五回展・四〇回展では記念展として「作品集」を作りました。去年が「四〇回記念展」、今後とも研鑽努力を続けていきたいものです。

文責　千葉硯心会事務局　石井昭正（三一期）

千葉硯心会書展
三九回展会場風景



40 回展「揚石舒雁先生」遺作

千葉硯心会書展
四〇回展会場風景

記念展「作品集」四〇回展
浅見錦龍先生賛助作品

第一〇回記念　群馬硯心会書展

群馬県在住・出身の東京学芸大学書道科卒業生有志が集まり、平成二三年一〇月一四日(金)から一八日(火)、群馬硯心会書展が開催されました。

群馬硯心会書展は、これまで二年に一度の開催を続けており、昨年は記念すべき第一〇回展を迎えることになりました。これまでは、前橋市民文化会館・展示室などで開催されていましたが、今回は節目の年であるため規模を大きくして、高崎シティーギャラリー・第2展示室での開催となりました。

本展の出品者は、真下京子（群馬硯心会会長）・小倉釣雲（事務局長）・佐藤一墨子・下谷洋子・計良袖石・杉山勇人・永田灌櫻の七名と、そして群馬県にゆかりのある硯心会会員である斎藤翠石・閑野忍の両氏を招待作家として招いての開催となりました。

一〇月一五日にはギャラリートークが開催され、出品作家による作品解説と来場者との質疑応答があり、貴重な意見交換の場となりました。群馬硯心会書展は、出品作家それぞれの個性の幅が広く、漢字・仮名・前衛・篆刻・漢字仮名交じり文などあらゆるジャンルの作風が一堂に会することが特徴といえます。また会場は公募展にも使用される広い空間であり、各人それぞれ五～一〇作品ほどが並んでいますので、さながら連立個展といってよいものであります。出品者数は限られておりますが、今後も精力的に活動を継続していきたいと考えております。

文責　杉山勇人(五〇期)

第一〇回記念群馬硯心会書展・会場風景

平成二四年七月一九日発行【平成二五年七月一九日再版】
硯心会書展だより・第一号　編集・硯心会書展事務局

▽一昨年の東日本大震災以降、復興へ向けた取り組みの中で、人々の「絆」が再確認されるようになりました。「硯心会書展だより」では、会員の皆様のご活躍をお伝えし、「絆」を繋げたいと考えています。硯心会会員のご活動に関する情報のご提供をお待ちしております。

※第二号は、平成二六年七月に発行予定です。